令和５年９月２６日 発行　第３１号

郷　土　の　か　ぜ

仙 台 市 民 図 書 館　郷土資料コーナーから

仙台駄菓子の老舗「石橋屋」の閉店に思う

仙台市民図書館郷土資料担当 渡邉 啓市

令和５年５月 25 日、若林区河原町にあった仙台駄菓子の老舗「石橋屋」が 138 年の歴史に幕を閉じました。直接の閉店理由は、昨年３月に起きた大地震により配管などが被害を受けた影響ということですが、昔懐かしい風情のある建物で、いかにも伝統ある仙台駄菓子のお店という感じがして自分自身、とても気に入っておりましたので、大変残念に思っています。

ところで、石橋屋さんの２代目店主にあたる石橋幸作さん（1900-1976）はご存じでしょうか。幸作さんは、長年にわたって駄菓子の研究を手掛けられ、1930 年頃より、奥さんとともに日本各地を調査するなどして、駄菓子に関する貴重な文献（『駄菓子のふるさと』1961 年、『みちのくの駄菓子』1962 年、『駄菓子風土記』1965 年）を残した方です。

しかしなぜ、彼は全国各地をまわって駄菓子のことについて書き残そうとしたのでしょうか。著書『駄菓子のふるさと』の序文（当時東北大学教授を務めていた堀一郎氏から寄せられたもの）によれば「何とかして上菓子と洋菓子に圧倒されて滅んでゆく駄菓子の歴史や種類製法などを知り、且つこれを後世に残したいとの志を立てた」そうです。そして、自ら絵筆を握って駄菓子の絵や駄菓子売りを模した粘土細工の人形を作成し、駄菓子屋の風景として彼の著書に添えています。その素朴な色合いと、ほのぼのとした情景は駄菓子の不思議な魅力のひとつになっています。

『駄菓子のふるさと』未来社

また、幸作さんの描いた絵は、江戸千代紙「仙台駄菓子づくし　石橋幸作筆」として江戸千代紙の題材にもなっており、現在でもその千代紙は多くの方に親しまれています。そのきっかけとなったのは、東京にある江戸千代紙の老舗の店主が仙台のデパートの催事に出展した際、幸作さんと出会ったことによるもので、その後、彼の描いた仙台駄菓子のスケッチが商品化されることに決まったのだそうです。

江戸千代紙
「仙台駄菓子づくし　石橋幸作筆」いせ辰版

＜参考図書＞
『ふるさとの駄菓子 石橋幸作が愛した味とかたち』LIXIL 出版／発行（S58ｲ）
『駄菓子のふるさと』石橋幸作／著（S58ｲ）
『みちのくの駄菓子』石橋幸作／著（S58ｲ）
『駄菓子風土記』石橋幸作／著（S58ｲ）
『日本の郷土産業１ 北海道・東北』日本地域社会研究所／編（S58ﾆ）

■ある日のレファレンスから

先日、剣豪であった井鳥巨雲（いとりきょうん※又はこうん）の子孫という方からのレファレンスを受けました。

井鳥巨雲は仙台藩から江戸に出て、古武道流派、雲弘（うんこう）流を創設した方で、同じ流派で熊本藩士の剣豪、井鳥景雲（いとりけいうん）の父として有名な方です。

話を伺ったところでは、親戚の方から、仙台で江戸時代に書かれたある人名録の中に全国的に珍しい井鳥という姓の方を見たことがあると聞き、当館に自分の先祖に繋がる資料が何か残っているのではないかということで、訪ねてみたそうです。

巨雲については『全国諸藩剣豪人名事典』間島勲／著の中に、初めは氏家八十郎と称していましたが後に姓を井鳥と改め、助之允要之・五郎右衛門とも称していたことなどが書かれていましたが、郷土資料をあたってはみたものの、井鳥という名前をなかなか見つけることができません。

ようやく『絵図・地図で見る仙台』高倉淳／［ほか］編著の解説にある「仙台城下絵図人名録」の中に、井鳥五郎右衛門という名前を見つけ、その人名録のもとになった仙台城下絵図で確認したところ、その絵図の中に、伊鳥五郎右衛門の名前が入った屋敷を発見することができました。

そして、その屋敷のあった場所を今の地図で比較してみると、当館のほど近い場所にあったことがわかり来館した方は、うれしそうな様子でその絵図を複写していきました。

■新着図書紹介（郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書）

『バリの桜　三浦襄の愛情物語』

今井 仁／著　双葉社　S28.9 ミ

第二次世界大戦中バリ島に住み、人々から「ババ・バリ(バリのお父さん)」と呼ばれていた日本人がいました。仙台市出身の三浦襄（みうらじょう）です。日本海軍の通訳をし、日本軍と住民のトラブルを仲裁したり、島内の孤児の面倒をみたりするなどして、住民から慕われていました。1945年、日本の敗戦によりインドネシア独立の約束を果たせず責任を取って自決。葬儀には数千人のバリ人がやってきて、その葬列は 1 キロ以上に渡ったといいます。しかし三浦襄の名は、出身地であるここ仙台でもほとんど知られていません。気になって調べてみると、新聞記事を含めいくつか関連資料を見つけることができました。詳しく知りたい方は、4階カウンターまでお声掛けください。

『4 コマ仙台弁こけし　仙台宮城方言まるわかり BOOK』

jugo／著　小林 隆／監修 小学館　S80 シ

2014 年に LINE スタンプとして誕生し、現在は宮城のご当地キャラクターとして活動している仙台弁を話すこけしたち。

本書は、仙台弁こけしの日常を春夏秋冬編に分け、日々の何気ないひとコマやあるある話に方言を盛り込んだ4コマ漫画です。江戸時代の仙台藩領内で話された言葉が元になった仙台弁は、宮城県全域の方言ですが、県北と県南、沿岸部と内陸部では方言に違いがあります。番外編には、方言の成り立ちや宮城の文化なども紹介されています。

方言を話す機会が減ってきている今だからこそ、あらためて仙台弁の魅力に触れてみてけさいん。

■編集後記■　今回、紹介した石橋屋さんについて、石橋幸作さんが残した駄菓子のスケッチや粘土細工、その他、仕事で使った鍋や包丁、菓子づくりの型や菓子を入れる木箱などの資料は仙台市歴史民俗資料館に寄贈されたと報道されていました。同資料館によると「仙台駄菓子を含め、食文化を紹介する企画展などで活用したい」ということなので、それまで楽しみに待っていたいと思います。

発 行：仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー
所在地：仙台市青葉区春日町2－1せんだいメディアテーク内 TEL：022-261-1585